

地域看護学

1 構 成 員

	平成 28 年 3 月 31 日現在	
教授	2 人	
病院教授	0 人	
准教授	1 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	0 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	3 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	0 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	1 人	
その他（技術補佐員等）	0 人	
合計	7 人	

2 教員の異動状況

異あさみ	（教授）	（H16.4.21～現職）
鈴木みずえ	（教授）	（H20.8.1～現職）
大塚敏子	（准教授）	（H20.4.1～講師、H24.8.1～現職）
水田明子	（助教）	（H20.4.1～現職）
山岸暁美	（助教）	（H26.4.1～現職）
佐野雪子	（助教）	（H26.9.1～現職）

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 27 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	15 編	(7 編)
そのインパクトファクターの合計	30.50	
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	2 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	11 編	(11 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数（うち邦文のもの）	8 編	(8 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	2 編	(0 編)

そのインパクトファクターの合計	0.00
-----------------	------

1. 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 鈴木みづえ, 吉村浩美, 宗像倫子, 鈴木美恵子, 須永訓子, 勝原裕美子, 桑原弓枝, 水野裕, 長田 久雄, 急性期病院の認知障害高齢者に対するパーソン・センタード・ケアをめざした看護実践自己評価尺度の開発, 老年看護学, 20 (2) 36-46, 2016 【IF:0.00】
2. 鈴木みづえ, 丸岡直子, 加藤真由美, 平松知子, 谷口好美, 小林小百合, 岡本恵里, 水谷信子, 泉キヨ子, 高原 昭, 赤井 信太郎, 住若 智子, 古田 良江, 老人保健施設の看護師による認知症高齢者のための転倒予防看護質指標の実態とその関連要因, 日本転倒予防学会誌, 2(1), 9-18, 2015 【IF:0.00】
3. 鈴木みづえ, 吉村浩美, 山岸暁美, 江上直美, 高木智美, 高野智子, 水野裕, 急性期病院の高齢者集合ケアにおける認知症ケアマッピング(DCM)がケアスタッフに及ぼす効果, 日本早期認知症学会誌, 8(1), 89-98, 2015 【IF:0.00】
4. Akiko Mizuta, Tatsuya Noda, Mieko Nakamura, Asami Tatsumi, Toshiyuki Ojima: Class Average Score for Teacher Support and Relief of Depression in Adolescents: A Population Study in Japan. journal of school health, 86(3), 173-180, 2016. 【IF:1.434】
5. 水田明子, 古山浩志, 山口久芳, 巽あさみ, 尾島俊之: 中学校教員の多忙感・互恵性及び信頼とメンタルヘルスとの関連. 東海公衆衛生雑誌, 3(1), 67-72, 2015. 【IF:0.00】
6. Yamagishi A, Morita T, Kawagoe S, Shimizu M, Ozawa T, An E, Kobayakawa M, Tsuneto S, Shima Y, Miyashita M: Talking about home hospices with terminally ill cancer patients—a multicenter survey of bereaved families. Gan To Kagaku Ryoho. 42(3), 327-33, 2015 【IF:0.00】
7. Yamagishi A, Morita T, Kawagoe S, Shimizu M, Ozawa T, An E, Kobayakawa M, Tsuneto S, Shima Y, Miyashita M: Length of home hospice care, family-perceived timing of referrals, perceived quality of care, and quality of death and dying in terminally ill cancer patients who died at home. Support Care Cancer. 23(2), 491-499, 2015 【IF:2.364】
8. 山岸暁美, 久部洋子, 山田雅子, 高橋則子, 鎌田良子, 福井小紀子, 石渡リキ: 在宅の視点のある病棟看護尺度の開発. 看護管理. 25(3), 248-254, 2015 【IF:0.00】
9. 山岸暁美, 森田達也, 川越正平, 清水恵, 小澤竹俊, 安恵美, 小早川誠, 恒藤暁, 志真泰夫, 宮下光令: 終末期がん患者に在宅療養移行をすすめるときの望ましいコミュニケーション, 多施設遺族研究; Talking about home hospice with terminally ill cancer patients: multicenter bereaved family survey. 癌と化学療法. 42(3), 324-330, 2015 【IF:0.00】

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
1. 今田 万里子, 巽 あさみ : 産業看護職の作業環境管理および作業管理の実践能力に影響を及ぼす要因, 日本産業看護学会誌, 2, 1-8, 2015 【IF:0.00】
 2. Takai Y, Yamamoto-Mitani N, Abe Y, Suzuki M : Literature review of pain management for people with chronic pain. Japan Journal of Nursing Science 12(3):167-183. 2015. doi: 10.1111/jjns. 12065. 【IF: 0.388】
 3. Kobayakawa M, Okamura H, Yamagishi A, Morita T, Kawagoe S, Shimizu M, Ozawa T, An E, Tsuneto S, Shima Y, Miyashita M. Family caregivers require mental health specialists for end-of-life psychosocial problems at home: a nationwide survey in Japan. Psychooncology. 2015 Sep 14. doi: 10.1002/pon.3【IF:2.44】
 4. Akiyama M, Hirai K, Takebayashi T, Morita T, Miyashita M, Takeuchi A, Yamagishi A, Kinoshita H, Shirahige Y, Eguchi K. The effects of community-wide dissemination of information on perceptions of palliative care, knowledge about opioids, and sense of security among cancer patients, their families, and the general public. Support Care Cancer. 2015 【IF:2.65】
 5. Kinoshita H, Maeda I, Morita T, Miyashita M, Yamagishi A, Shirahige Y, Takebayashi T, Yamaguchi T, Igarashi A and Eguchi K. Place of death and the differences in patient quality of death and dying and caregiver burden. J Clin Oncol. 1;33(4):357-363, 2015 【IF:18.43】
 6. Kizawa Y, Morita T, Miyashita M, Shinjo T, Yamagishi A, Suzuki S, Kinoshita H, Shirahige Y, Yamaguchi T, Eguchi K. Improvements in Physicians' Knowledge, Difficulties, and Self-Reported Practice After a Regional Palliative Care Program. J Pain Symptom Manage. 50(2):232-40, 2015 【IF:2.795】

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
1. 柳川洋, 尾島俊之, 北村邦夫, 中村好一, 倉田貞美, 近藤今子, 巽あさみ, 千原泉, 坪井聡, 中村美詠子, 西山慶子, 原岡智子, 水田明子, 渡辺晃紀 (五十音順), 保健指導ノート2016 公衆衛生の現状, (社) 日本家族計画協会, 東京
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Ito T. Umise S. Suzuki, M, Tani, S. Gait measurement and evaluation system for diagnosis of elderly people's gait condition to prevent fall Mechatronics 687 – 693, 2015 IEEE International Conference on Advanced Intelligent Mechatronics (AIM) , 2015 DOI: 10.1109/AIM.2015.7222617 【IF:0.00】

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 異 あさみ : 労働者を対象とした睡眠保健活動,睡眠医療,9 (3) 339-351,2015
2. 異 あさみ : あなたもわかる産業ストレス研究 (質的研究編) 質的研究をはじめの-質的研究のすすめかたと留意点-産業ストレス研究,22 (2) ,147-152,2015
3. 鈴木 みずえ, 認知症高齢者の転倒リスクとその予防へのケア 気づく力と見守る目を養う危険予知トレーニングを中心に, Geriatric Medicine, 53(8), 815-825, 2015
4. 鈴木 みずえ, 認知症の方への転倒予防マニュアル:夜間の転倒予防 昼夜リズム障害・夜間の徘徊から起こる転倒を予防する, 認知症ケア最前線, 54, 92-94, 2015
5. 鈴木 みずえ, 認知症の方への転倒予防マニュアル:認知症の方の「転倒につながる行動」を予防する, 認知症ケア最前線, 53, 112-116, 2015
6. 鈴木 みずえ, 認知症の方への転倒予防マニュアル:認知症の中核症状から起こる転倒を予防する 認知症ケア最前線, 52, 102-104, 2015
7. 鈴木 みずえ, 認知症の人の痛みの考え方とケア, おはよう 21, 26(13), 64-67, 2015
8. 鈴木 みずえ, 認知症の方への転倒予防マニュアル 認知症の方への生活環境設定の工夫,認知症ケア最前線,55,99-103, 2016
9. 鈴木 みずえ, 認知症の方への転倒予防マニュアル 転倒してしまったときの対応方法, 認知症ケア最前線, 51, 70-72, 2015
10. 鈴木 みずえ, 【転倒・転落ハイリスク患者へのアプローチ】 転倒・転落の考え方と転倒・転落リスクのアセスメント, 看護技術,61(6), 577-585,2015.
11. 鈴木 みずえ, 金森 雅夫, 認知症高齢者の転倒予防におけるエビデンスに基づくケア介入, 日本転倒予防学会誌,1(3),3-9,2015

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

（４）著 書

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
 - 1. 鈴木みずえ，急性期病院での認知症ケア，p89-97，島田 裕之(編集)，フレイルの予防とリハビリテーション，東京，医歯薬出版，2015，181 ページ
 - 2. 鈴木みずえ，高齢者の転倒に関する看護の問題，p127-141，上田 諭 (編集)，認知症によりそう（こころの科学）―「治す」から「あるがまま」へ，東京，日本評論社，2015，156 ページ
 - 3. 鈴木みずえ，老年症候群とフレイル，p21-29，萩野 浩 (編集)，医療・介護スタッフのための高齢者の転倒・骨折予防―転ばぬ先の生活指導，大阪，医薬ジャーナル社，2015，183 ページ
 - 4. 鈴木みずえ，安全管理の技術，p.456-487,鈴木みずえ,片山はるみ編集、なぜ？できる？わかる？私の看護技術、2015
 - 5. 鈴木みずえ，安全確保の技術,p. 488-479,鈴木みずえ,片山はるみ編集、なぜ？できる？わかる？私の看護技術、2015
 - 6. 鈴木みずえ,看護学視点からの早期認知症予防, 新井平伊 (監修)、認知症予防テキストブック、早期認知症学会,p.87-89, 2015
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
 - 1. 鈴木 久美,野沢 明子,森 一恵,今戸 美奈子,大島 富美代,木下 幸代,巽 あさみほか：慢性期看護 病气とともに生活する人を支える,2015 社会資源の活用, 南江堂,東京
 - 2. 尾崎 章子,巽 あさみ:健康づくりのための睡眠指針 2014～睡眠 12 箇条～に基づいた保健指導ハンドブック,厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）,健康日本 21（第 2 次）に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究 2015

（５）症例報告

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
 - 1. 巽 あさみ,尾崎 章子：睡眠指針の普及と啓発に関する研究-ツールの効果検証に関する研究-,健康日本 21(第 2 次)に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究 平成 27 年度総括・分担研究報告書,93-125,2015

インパクトファクターの小計 [0.00]

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
1. 江上 直美, 吉村 浩美, 高野 智子, 鈴木 みづえ, 高木 智美, A 病棟における認知症高齢者の笑顔があふれる集団ケアの取り組み, 認知症ケア事例ジャーナル, 8(3), 219-224, 2015

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成 27 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

5 医学研究費取得状況 (万円未満四捨五入)

	平成 27 年度
(1) 科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）	12 件 (1,247 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	4 件 (415 万円)
(3) 日本医療研究開発機構(AMED)による研究助成	0 件 (0 万円)
(4) 科学技術振興機構(JST) による研究助成	0 件 (0 万円)
(5) 他政府機関による研究助成	0 件 (0 万円)
(6) 財団助成金	1 件 (119 万円)
(7) 受託研究または共同研究	1 件 (127 万円)
(8) 奨学寄附金	0 件 (0 万円)

(1) 科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）

1. 巽あさみ（研究代表者），基盤研究（C），職域のうつ病、自殺を予防するための睡眠保健指導ICTシステムの開発 91万円（継続）
2. 巽あさみ（研究分担者），基盤研究（C），ストレスと睡眠の質や量、健康感のメカニズムに関する生理機能からのアプローチ，10.4万（継続）
3. 巽あさみ（研究分担者）基盤研究（C），発達障害児を持つ養育者支援における保健師-保育士の連携促進プログラムの開発，研究代表者 大塚敏子，10万円（新規）
4. 鈴木みづえ（研究代表者），基盤研究（B），認知症高齢者の転倒予防質評価指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発，260万円（継続）
5. 鈴木みづえ（研究代表者），挑戦的萌芽，看護師が困難と感じる認知症の行動心理症状の明確化と急性期認知症の看護モデルの開発，104万円（継続）
6. 鈴木みづえ（研究分担者），基盤研究（B），長期療養施設における疼痛ケアの質向上のための教育プログラム開発，研究代表者 山本則子，50万円（継続）
7. 鈴木みづえ（研究分担者），基盤研究（B），臨床判断能力育成を包括した転倒予防のコンピューターシミュレーションプログラムの開発，研究代表者 加藤真由美，15万円（継続）

8. 大塚敏子 (研究代表者) 科学研究費補助金 基盤研究 (C), 発達障害児をもつ養育者支援における保健師-保育士の連携促進プログラムの開発, 50万円 (新規)
9. 大塚敏子 (研究分担者) 科学研究費補助金 基盤研究 (B), メタボリックシンドロームのリスクをもつ成人への費用対効果の高い保健指導の開発、研究代表者 荒木田美香子, 10万円 (継続)
10. 水田明子 (研究代表者), 基盤研究 (C), 中学生の抑うつと家族機能及びソーシャルサポートの関連, 45万円 (継続)
11. 水田明子 (研究代表者), 基盤研究 (C), 思春期の抑うつと乳幼児期からの家庭要因及び環境要因に関する研究, 132万円 (新規)
12. 山岸暁美 (研究代表者) 基盤研究 (B), 救急・在宅医療連携による地域介入が終末期医療に及ぼす影響の実証とメカニズムの解明, 470万円 (新規)

(2) 厚生労働科学研究費

1. 巽あさみ (研究分担者) 健康日本21 (第2次) に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究(H-25-循環器等 (生習) 一般 007)、研究代表者 兼板佳孝, 40万円 (新規)
2. 鈴木みづえ (研究分担者): 介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究, 研究代表者 服部英幸 (長寿医療センター), 55万円 (継続)
3. 山岸暁美 (研究分担者) 地域医療基盤開発推進研究事業 統合ケアを指向した新たな地域包括ケアステーションに関する研究, 研究代表者 堀田聡子, 320万 (新規)
4. 山岸暁美 (研究分担者) がん対策推進総合研究事業 地域包括緩和ケアプログラムを活用したがん医療における地域連携推進に関する研究, (新規)

(6) 財団助成金

1. 山岸暁美 (研究代表者) ファイザーヘルス リサーチ研究助成 Research on the quality of end of life care and health and long-term care expenditures 119万円 (新規)

(7) 受託研究または共同研究

1. 山岸暁美 千葉県松戸市医師会、松戸市教育委員会、松戸市による健康啓発事業 127万円 (継続)

6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	2件
(2) シンポジウム発表数	0件	5件
(3) 学会座長回数	0件	5件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	17件
(6) 一般演題発表数	5件	

- (1) 国際学会等開催・参加

- 1) 国際学会・会議等の開催
- 2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演
- 3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表
- 4) 国際学会・会議等での座長
- 5) 一般発表

ポスター発表

1. Mizue Suzuki, Hideyuki Hatori, Hajime Ooshiro, Masao kanamori, The effects of the behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD) and care dependency on quality of life among older persons with dementia, 10th Asia / Oceania Congress of Gerontology and Geriatrics 2015 (IAGG Asia/Oceania Congress), Chiang Mai, Thailand. 19th October 2015
2. Mizue Suzuki, Hideyuki Hatori, Hajime Ooshiro, Masao kanamori, The influence of behavioral and psychological symptoms of dementia on care dependency among elderly adults, 10th Asia / Oceania Congress of Gerontology and Geriatrics 2015 (IAGG Asia/Oceania 2015 Congress), Chiang Mai, Thailand. 19th October 2015
3. Ono S Shinozaki E, Yoshimura H, Suzuki M, Kurita AI, Development of person-centered care training program for nurse: using simulated patients who act elder patients with dementia, 10th Asia / Oceania Congress of Gerontology and Geriatrics 2015 (IAGG Asia/Oceania 2015 Congress), Chiang Mai, Thailand. 19th October 2015
4. Makimoto K, Kang Y, Kobayashi S, Liao X, Pan-uthai S, Sung H, Suzuki M, Yamakawa M, Prevalence of symptoms of dementia in east-Asian cross-cultural (episodic) study, 10th Asia / Oceania Congress of Gerontology and Geriatrics 2015 (IAGG Asia/Oceania 2015 Congress), Chiang Mai, Thailand. 19th October 2015
5. Akiko Mizuta, Asami Tatsumi, Toshiyuki Ojima: Association between economic status and BMI among adolescents in Japan, “The 6th international conference on Community Health Nursing Research”, August 2015, Seoul KOREA.

(2) 国内学会の開催・参加

- 1) 主催した学会名
- 2) 学会における特別講演・招待講演
 1. 鈴木みずえ 急性期医療の場における認知症の人のケア, 日本看護科学学会, 2015年12月5日, 広島
 2. 鈴木みずえ 認知症高齢者の転倒予防, 日本転倒予防学会第2回学術集会, 2015年10月10日, 京都

3) シンポジウム発表

1. 鈴木みずえ 看護専門領域におけるアセスメントと看護診断：認知症高齢者に対するアセスメントと看護診断第21回日本看護診断学会学術大会, 2015年7月19日, 福井
2. 鈴木みずえ 身体的治療を受ける認知症患者のケア：実践に必要な専門的知識, 第80回日本循環器学会学術集会, 2016年3月20日, 仙台
3. 鈴木みずえ 認知症高齢者の転倒予防:認知症高齢者の視点から考える転倒予防第56回日本神経学会学術大会、2015年5月20日,新潟
4. 鈴木みずえ 神経疾患患者の転倒を予防するために～チームで取り組む転倒予防～:認知症高齢者の転倒予防：看護の立場から, 第33回神経内科治療学会総会,2015年11月27日,名古屋
5. 鈴木みずえ 認知症高齢者の転倒予防, 第16回日本認知症ケア学会大会, 2015年5月23日, 札幌

4) 座長をした学会名

1. 鈴木みずえ 認知症高齢者の転倒予防, 日本転倒予防学会第2回学術集会, 2015年10月11日, 京都
2. 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会 東海地方会, 名古屋, 2015年11月14日
3. 鈴木みずえ 第16回日本認知症ケア学会大会, 2015年5月24日, 札幌
4. 鈴木みずえ 日本看護研究学会第41回学術集会, 2015年8月23日, 広島
5. 山岸暁美 第16回日本早期認知症学会学術集会, 2015年10月11日, 新潟

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 巽あさみ 日本産業衛生学会 代議員、編集委員
2. 巽あさみ 日本産業衛生学会東海地方会 理事
3. 巽あさみ 日本産業衛生学会産業看護部会 研究 代表幹事
4. 巽あさみ 日本地域看護学会 評議員、査読委員
5. 巽あさみ 日本看護医療学会 理事、評議員、査読委員
6. 巽あさみ 日本産業ストレス学会 理事、編集委員 産業看護職委員長
7. 巽あさみ 日本産業看護学会 理事 編集委員長
8. 巽あさみ 東海公衆衛生学会 評議員
9. 鈴木みずえ 日本看護研究学会 理事・査読委員・東海地方会世話人
10. 鈴木みずえ 日本老年看護学会 評議員
11. 鈴木みずえ 第21回日本老年看護学会学術集会企画委員
12. 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会 代議員・査読委員・東海部会委員
13. 鈴木みずえ 第17回日本認知症ケア学会企画委員
14. 鈴木みずえ 日本看護科学学会 代議員・編集委員
15. 鈴木みずえ 日本転倒予防学会 副理事長
16. 鈴木みずえ 日本早期認知症学会 理事
17. 山岸暁美 日本早期認知症学会 学術誌編集委員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	4件	5件

(1) 国内の英文雑誌等の編集

1. 巽あさみ 4回 Journal of Occupational Health Associate Editor、有、有

(2) 外国の学術雑誌の編集

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

1. 鈴木みずえ 1回 American Journal of Alzheimer's Disease and Other Dementias (米国)
2. 鈴木みずえ 3回 Geriatrics and Gerontology International (日本)
3. 鈴木みずえ 1回 Japanese Journal of Nursing Science (日本)
4. 山岸暁美 1回 BMJ Open (UK) 【IF 2.07】
5. 山岸暁美 2回 Support Care Cancer. (USA) 【IF2.65】
6. 山岸暁美 2回 J Pain Symptom Manage. (USA) 【IF3.24】

9 共同研究の実施状況

	平成27年度
(1) 国際共同研究	1件
(2) 国内共同研究	13件
(3) 学内共同研究	0件

(1) 国際共同研究

1. 山岸暁美 訪問看護師の労働環境および労働条件に関する日蘭比較研究 オランダ 平成27年度 共同調査 320万 厚生労働科学研究費

(2) 国内共同研究

1. 巽あさみ, 小林章雄 (愛知医科大学): 職域のうつ病、自殺を予防するための睡眠保健指導 ICT システムの開発
2. 巽あさみ, 飯田忠行 (広島県立大学): ストレスと睡眠の質や量、健康感のメカニズムに関する生理機能からのアプローチ
3. 巽あさみ, 兼板佳孝 (大分大学), 尾崎章子 (東北大学) 他: 健康日本21 (第2次) に即した睡眠指針への改訂に資するための疫学研究
4. 鈴木みずえ, 泉キヨ子 (帝京科学大学), 谷口好美, 加藤真由美 (金沢大学), 平松知子 (金沢医科大学), 丸岡直子, 寺井梨恵子 (石川県立大学), 島田裕之 (長寿医療研究センター), 加藤真由美 (金沢大学), 六角僚子, 小林小百合, 関由香里 (東京工科大学): 認知症高齢者の転倒予防質評価指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発
5. 鈴木みずえ, 加藤真由美 (金沢大学): 臨床判断能力を包括した転倒予防のシミュレーションプログラムの開発
6. 鈴木みずえ, 吉村浩美 (聖隷三方原病院): 急性期病院における認知症看護モデルの開発
7. 鈴木みずえ, 山本則子, 高井ゆかり (東京大学): 長期療養施設における疼痛の訴えの認知症高齢者の

痛みの実態に関する質的研究

8. 鈴木みずえ、服部英幸（長寿医療センター）：介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究
9. 山岸暁美 地区医師会による健康啓発事業 Child to Community アプローチによる住民意識の変化 平成 26 年—平成 31 年
10. 山岸暁美 Research on the quality of end of life care and health and long-term care expenditures 平成 27 年—平成 28 年
11. 山岸暁美 統合ケアを指向した新たな地域包括ケアステーションに関する研究 平成 27 年
12. 山岸暁美 地域包括緩和ケアプログラムを活用したがん医療における地域連携推進に関する研究 平成 27 年—平成 29 年
13. 山岸暁美 救急・在宅医療連携による地域介入が終末期医療に及ぼす影響の実証とメカニズムの解明 平成 27—平成 30 年

10 産学共同研究

	平成 27 年度
産学共同研究	0 件

11 受賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

● 巽あさみ

・「厚生労働省健康局「健康づくりのための睡眠指針 2014～睡眠指針 12 箇条～」の普及・啓発のために作成したツール(以下睡眠保健指導ツール)について、その効果を検証するために、質問紙調査およびフォーカス・グループ・インタビューを行い質的記述的に分析した。その結果、指導に使用する対象者である講演会参加者と保健センター保健師等からのツールに対する評価は、90.2%～94.1%が睡眠に役立つツールと回答し良い評価であった。また、実際に使用した保健師からは科学的なエビデンスが明確で、対象者に納得してもらいやすい本ツールは保健指導の道しるべ等効果を認知していた。睡眠指針の普及・啓発を促進するツールとして、専門職が活用する保健指導ツール（「健康づくりのための睡眠指針に基づいた保健指導の手引き」）、国民が健康づくりのために活用するツール（「ぐっスリープガイド」）の本ツールは実効性ある睡眠保健指導のツールであることが検証された。

● 鈴木みずえ

・認知症高齢者の転倒予防質評価指標による看護介入プログラムと実践継続システムの開発
介護保険施設における認知症高齢者の転倒予防の看護実践の専門性の向上を目的に看護介入プログラムと実践継続システムの文献レビューと介入プログラムを検討した。鈴木みずえ，泉キヨ子（帝京科学大学），谷口好美，加藤真由美（金沢大学），平松知子（金沢医科大学），丸岡直子，寺井梨恵子（石川県立大学），島田裕之（長寿医療研究センター），六角僚子，小林小百合，関由香里（東京工科大学）

・臨床判断能力を包括した転倒予防のシミュレーションプログラムの開発
看護師の転倒予防に関する臨床判断能力を向上させるための転倒予防のシミュレーションプログラ

ムの内容を検討し、看護師によるインターネットによる自己学習プログラムの開発に取り組んだ。鈴木みずえ、加藤真由美（金沢大学）

- ・急性期病院における認知症看護モデルの開発

急性期病院における認知障害高齢者の看護尺度を開発し、因子分析の結果、4因子となり、パーソン・センタード・ケアの理念の4つの内容信頼性・妥当性に関して検討した。鈴木みずえ、吉村浩美（聖隷三方原病院）

- ・長期療養施設における疼痛の訴えの認知症高齢者の痛みの実態に関する質的研究

疼痛の訴えのある認知症高齢者に対してインタビュー調査を実施し、痛みの原因は過去の疾患・受傷による痛みや記憶として残っている痛みの経験による影響が絡んでいることや対人関係のストレス、季節・天候の変化により影響があることを明らかにした。鈴木みずえ、山本則子、高井ゆかり（東京大学）

- ・介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究

認知症高齢者の BPSD の実態と認知症高齢者のケア依存度と ADL や BPSD の関係について、パス解析では、ケア依存度は ADL と NPI 「J.異常行動」から有意に影響を受けて、QOLD の「自分らしさの表現」に影響を与えていた。認知症高齢者の BPSD 緩和に対するケアを実施することで、ケア依存度が改善し、自分らしさの表現などの QOLD が向上することが示唆された。鈴木みずえ、服部英幸（長寿医療センター）

- ・急性期病院における認知症看護モデルの開発

急性期病院における急性期認知症看護モデルが明らかになったため、今後、急性期病院における認知症高齢者研修プログラムの評価効果検証や国際比較研究に発展させる予定である。鈴木みずえ、吉村浩美（聖隷三方原病院）

- 大塚敏子

- ・発達障害児の養育者に対する保健師および保育士の支援実態と相互役割期待

「発達障害があると思われるが診断はされていない子ども」を持つ養育者に対する保健師および保育士の支援や両職種の連携の実態を明らかにするため、保育士 12 名、保健師 10 名へのインタビュー内容を分析した。結果、保育士では 500 コード、97 サブカテゴリ、31 カテゴリ、7 コアカテゴリを形成した。保健師では 513 コード、89 サブカテゴリ、30 カテゴリ、6 コアカテゴリを形成した。保育士は保健師との連携について、双方向的な情報のやり取りや協力による有効な養育者支援の経験を持ちながらも、保健師とは日頃の関わりが少なく連携にまで至らないと感知していた。さらに保育士の情報提供に関して保健師からフィードバックがないとの一方通行感による連携の意義の感じづらさを持っていた。しかし家庭に入っていけるなど保健師ならではの機能発揮への期待も持っていた。保健師は、保育士との連携において個人情報保護の視点を持ちつつ母子の利益になるかを基準に保育士への情報提供を行っていた。日々母子との関わっている保育士からの情報提供による保護者支援の進展を経験しており保育士からの情報を重視していた。一方これまで保健師が関わったことがない「関わりの糸口がない母子」に関する園の相談への困難感があり園が糸口を作ってくれることを望んでいた。また発達支援体制の整備や保育士の力量向上に伴い 園との連携における保健師自身の役割に関する迷いも抱えていた。（大塚敏子、巽あさみ）

- 水田明子

- ・ 思春期の抑うつと先生からのサポートとの関連

中学生の抑うつと先生からのサポートとの関連を明らかにした。分析対象者は質問紙調査を行った2,780人とクラス担任93人。先生サポートのクラス平均値を説明変数、抑うつを目的変数として交絡因子を調整したロジスティック回帰分析を行った。クラス平均で見た先生サポートと生徒の抑うつは有意な負の関連があった。更に、クラス平均でみた先生サポートと成績満足度の交互作用が有意であった。本研究の結果はクラスレベルの介入と生徒のメンタルヘルスを促進させる。

- ・ 中学校教員の多忙感、互恵性及び信頼とメンタルヘルスとの関連

静岡県内の2市にある公立中学校全8校の教員に質問紙調査を行った。分析対象者は113人。メンタルヘルスの指標として気分障害・不安障害のスクリーニング調査票K6を用いた。多忙感、互恵性、信頼との関連について、ロジスティック回帰分析を行った。K6と生徒指導が必要な生徒の増加は正の関連、信頼は負の関連があった。生徒指導が必要な生徒の増加は教員のメンタルヘルスのリスク要因、信頼はメンタルヘルスの促進要因であることが示唆された。

- 山岸暁美

- ・ Research on the quality of end of life care and health and long-term care expenditures

約100例の症例から、遺族の代理評価による終末期のケアの質と要した医療費・介護費用の比較や関連性を検証した（山岸暁美、堀田聡子、西村周三、森田洋之、米澤恵子）。

- ・ 統合ケアを指向した新たな地域包括ケアステーションに関する研究

我が国における地域ケアの持続可能性を高める多主体多職種協働ケアチーム（地域包括ケアステーション）を構想するうえでの基礎資料とすることを目的とし、訪問看護師らの働き方、医療・福祉等連携する多職種との関係、ケア対象者の状態像やケアの内容、国民の意識（死生観など）、社会保険制度なども含めた検討を行った。またこれらに関する知覧の比較研究を実施した（山岸暁美、堀田聡子、西村周三、成瀬昂、野口麻里子、吉江悟）。

- ・ 地域包括緩和ケアプログラムを活用したがん医療における地域連携推進に関する研究

全国各二次医療圏で、がん緩和ケアのネットワークを構築し、地域の特性を踏まえた地域包括緩和ケアプログラムを作成し実施していく人材（地域緩和ケアプログラムコーディネーター）を養成する研修プログラムを開発するための基礎調査を実施した。さらに、これらの人材を支援していく中央機能のあり方についても検討し、全国でがんの地域緩和ケアの提供体制の整備を進めていく包括的な方策を議論した（山岸暁美、加藤雅志、森田達也、木澤義之、吉田沙蘭、福井小紀子、川越正平）。

- ・ 救急・在宅医療連携による地域介入が終末期医療に及ぼす影響の実証とメカニズムの解明

介入前調査として、住民を対象とした質問紙調査（住民台帳から無作為抽出された40-80歳のM市住民地域に医療・介護を受けることに関する安心感（安心感尺度：feelings of support and security scale）、在宅療養に関するイメージ尺度、アドバンスケアプランニングの実態（心肺蘇生などの終末期に受ける治療について医師と話をしたことがあるか）を調査した（山岸暁美、川越正平、和座一弘、森田達也、奥隅廣人、市場卓）。

- ・ 地区医師会による健康啓発事業

地域のプライマリ・ヘルスケアを担っている地区医師会の健康啓発事業の前調査として、無作為抽

出した住民を対象に質問紙調査を実施した。また事業として、地区医師会による中学校への出前講座「いのちの尊さ—中学生の君に考えて欲しいこと」「認知症—中学生の君ができること」を実施し、その前後に受講する中学生およびその保護者に対する質問紙調査を実施した（山岸暁美、松戸市医師会、松戸市教育委員会、松戸市）。

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

1. 巽あさみ「健康づくりのための睡眠指針 2014 に基づいた保健指導ハンドブック」および「健康づくりのための睡眠指針 2014 に基づいた保健指導 ハンドブックの活用効果を高める教材」
2. 鈴木みずえ 介護施設、一般病院における認知症 BPSD 初期対応の効果検証に関する研究
認知症高齢者のケア依存度は ADL と BPSD の影響を受けて、QOLD に影響を与えていたことを明らかにした。認知症高齢者の BPSD 緩和に対するケアを実施することで、ケア依存度が改善し、自分らしさの表現などの QOLD が向上することが示唆された。鈴木みずえ、服部英幸（長寿医療センター）

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

15 新聞、雑誌等による報道

1. 巽あさみ 健康日本 2 1 WEB 版「健康づくりのための睡眠指針 2014 に基づいた保健指導ハンドブック」および「健康づくりのための睡眠指針 2014 に基づいた保健指導 ハンドブックの活用効果を高める教材」、平成 28 年 2 月 2 日
2. 鈴木みずえ 認知症ある入院患者どう対応、読売新聞、2015 年 12 月 8 日
3. 鈴木みずえ 人間性尊重し、認知症ケア東区講演会 問題行動や原因事例紹介、静岡新聞、2015 年 7 月 14 日
4. 鈴木みずえ 認知症の人尊重実践例報告、中日新聞、2015 年 7 月 15 日
5. 鈴木みずえ 患者の認知症悩む病院 治療に抵抗、徘徊や暴言、拘束・薬で鎮静 症状悪化の恐れ、2015 年 11 月 8 日読売新聞
6. 鈴木みずえ 精神医療の学術研究、Front ZERO、静岡第一 TV、2015 年 6 月 21 日
7. 鈴木みずえ 認知症ケアの専門師会、あいチャン、静岡第一 TV、2015 年 7 月 13 日
8. 鈴木みずえ 医療現場の取組み、症状緩和に「手のぬくもり」new every、静岡第一 TV、2015 年 7 月 31 日
9. 鈴木みずえ 認知症高齢者の痛みに気付いて 浜医大・鈴木教授ら論文受賞、静岡新聞、2015 年 6 月 23 日
10. 鈴木みずえ 日本認知症ケア学会シンポジウム転倒予防本人の気持ちに目を向けて、丁寧なアセスメント、「危険」と押さえつけるのは逆効果、介護新聞、2015 年 5 月 28 日
11. 鈴木みずえ 認知症高齢者の痛みの研究、中日新聞、2015 年 6 月 24 日